

平成 19 年 10 月 1 日

しだいに暑さが和らぎ秋の訪れを感じられるようになりました。今回は「気管支喘息と吸入薬」についてお話したいと思います。



●はじめに

薬は正しい理解と使用によって、優れた効果を発揮してくれます。薬には色々な形のものがありますが、その中でも吸入薬は使用方法が難しく、注意すべきことが多い薬です。喘息によって死亡する要因には、受診の遅れや急激な予期せぬ悪化とともに、吸入薬の不適切な使用との関係が指摘されています。

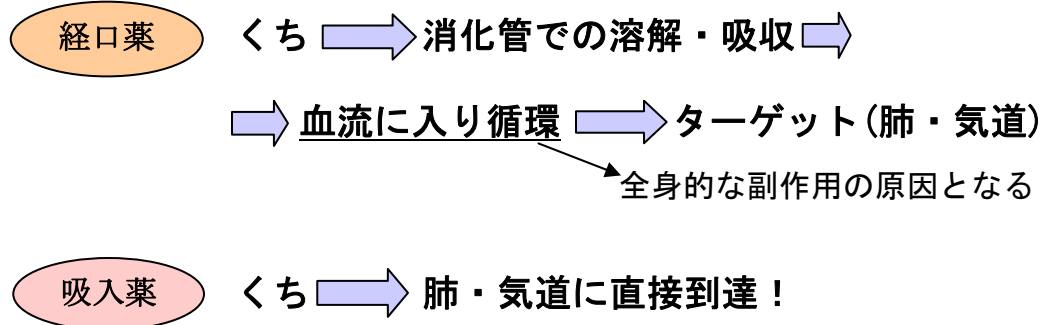
●吸入薬とは？

傷や皮膚の病気には塗り薬、目の病気には目薬を使用するように、肺の病気には吸入薬が最も効果的で副作用の少ない治療法とされています。吸入薬は、薬を霧状に噴出させ、口から吸い込み気管支や肺に作用させる薬です。



●吸入薬と経口薬

気管支喘息の患者さんは、主に吸入薬と経口薬で治療を行います。一般的にお薬といえば口から服用する経口薬を想像される方が多いと思いますが、両者はどのように違うのでしょうか？



★吸入薬の利点★

- ・肺・気道に直接作用するので、全身的な副作用が少ない。
- ・少量の薬剤で効果を発揮する（経口薬の 1/20～1/10）

★吸入薬の欠点★

- ・吸入される薬剤の肺への到達量によって治療効果が大きく左右されるため、吸入手技が不適切であると、十分な効果が期待できない。

●吸入薬の使用上の注意

気管支喘息患者さんが使用する吸入薬について、具体的にはどのような注意が必要なのでしょう？ここでは気管支喘息患者さんに、特によく使用される吸入薬 3 種についてご紹介したいと思います。



吸入ステロイド薬

<作用>

喘息の原因である気道の炎症を抑えて、気道の過敏性を緩和し、咳や息切れなど症状をやわらげる。

<主な商品名>オルベスコ、キュバール、パルミコート、フルタイド

<使用に関する注意点>

- 症状が現れないように維持する目的で継続的に使用する薬剤で、発作を軽減するための薬ではないので、毎日規則正しく使用する。
- 使用が不規則になると症状の悪化や発作につながる恐れがある。
- 副作用（口腔内の感染症）予防のため、吸入後は必ずうがいをする。

長時間作用型β2刺激薬

<作用>

気道(気管支)を広げて呼吸を楽にする。作用時間は 12 時間と長い。

<主な商品名>セレベント

<使用に関する注意点>

- 短時間作用型とは違い、効果が現れるのに時間がかかる。既に起きている発作を速やかに軽減する薬ではなく、毎日規則正しく使用する。
- 吸入時、口腔内に沈着した薬剤が飲み込まれ、吸収されると全身的な副作用(ふるえ、しびれ、筋肉がつる)を起こす可能性があるため、吸入後はうがいをする。

短時間作用型β2刺激薬

<作用>

気道(気管支)を広げて呼吸を楽にする。速効性があり、喘息発作時のみ使用する。

<主な商品名>アイロミール、サルタノール、ベネトリン、ベロテック、メプチン

<使用に関する注意点>

- 発作時のみ使用する。吸入タイミングが遅いと十分な効果が発揮されない。
- 発作の初期症状(喘鳴、咳が止まらない等)が現れた時使用する。
- 1回吸入後も呼吸が苦しい場合、2分以上(できれば5分以上)あけて2回目の吸入を行う。2回吸入後、治まらなければ速やかに受診する。
- 吸入時、口腔内に沈着した薬剤が飲み込まれ、吸収されると全身的な副作用(ふるえ、しびれ、筋肉がつる)を起こす可能性があるため、吸入後はうがいをする。

<参照>

薬局 増刊号 2007, Vol.58, No.4(呼吸疾患)

SAFE-DI 薬効シリーズ 2007.8 「主な気管支喘息治療薬・COPD 治療薬」